

SD トークセッション <西村俊夫アンケート>

質問1 「スペースデザインとは」

あなたが思う新制作のスペースデザイン(部)とは何ですか？その魅力はどこにありますか？

作品と見る人との関係が生まれる空間、この空間をデザインすることがスペースデザインだと思っています。この空間は常に変化します。生活の中からテーマを導き出し、造形活動を通してこの空間を求めることがスペースデザイン部の特徴だと思います。ここでの空間は、既存のカテゴリーの重なり合う部分あるいはその周縁に位置しているような気がします。

質問2 「テーマ」

あなたの作品(または創作)のテーマや特徴は？

作品と見る人との関係性に着目しています。規則的に配置したパーツの形状に変化を与えることや同一形状のパーツを積層する際の角度に変化をつけることなどによって「見え方」に変化が生まれます。並べたパーツの形状を規則的に変化させた立体を移動しながら見ていると、見えていなかった「形」が生まれることがあります。そうした変化が生まれることをねらいとしています。

質問3 「素材と技法」

素材と技法についてのこれまでの工夫などを簡単に教えてください。

以前は木材、合板、プラスチック、金属など様々な材料を使用していました。アルミの丸棒を加工するために旋盤を使用したこともあります。テーマを設定するようになってからは、木材のみを使用するようになりました。杉、松、桧などの針葉樹が殆どです。身近な存在でもありますし、柔らかな手触りや独特の香りが気に入ったからです。使用する道具は、簡単な木工機械と鉋等の手道具です。

質問4 「空間表現」

美術館の展示空間に作品を表現する際に特に意識することは何ですか？

また、これまで経験した都美術館と新美術館に対する意識の違いはありますか？

昨年、第85回展で、初めて暗室に出品しました。以前から明かりを使った作品の制作には興味があったのですが、アイデアのレベルで止まっていて具体化しませんでした。去年は久しぶりの出品ということもあって、新たな気持ちで経験のない空間表現に挑みました。明かりが加わることで空間が拡張されたような気分になります。こうした展示空間を持つこともスペースデザイン部の特徴だと思います。

質問5 「イメージの源泉」

あなたの創作イメージの源泉は何ですか？（複数可）

特に影響を受けたモノ・コト・ヒトなどがありましたら教えてください。

イメージの源泉と思えるものは、1970年大学1年生の時に東京都美術館で見た第10回日本国際美術展（東京ビエンナーレ）と同じく1970年に開催された大阪万国博覧会です。一番の感想は「これも美術・アートなのか…」という想いと「建築は自由だな…」という想いでした。学生（大学生・大学院生）時代に見たり、聞いたり、考えたりしたことがその後の活動の原点になっているような気がします。

質問6 「ターニングポイント」

これまでの創作活動（創作テーマ）の変遷やターニングポイントについて教えてください。

第63回新制作展に出品した作品がターニングポイントであると思っています。杉の薄い板で大きなシートを作り、このシートの中央を円形にくり抜き一定の間隔を空けて積層しました。移動しながら作品を見ると、一点から見た時には見えていなかった「形」が見えてきます。このような作品の制作に関心を持つようになりました。この作品以降、主に木材を使用するようになりました。

質問7 「エピソード」

これまでのエピソードを幾つか教えてください。

（SDとの出会い、応募のきっかけ、初期作品について、失敗談など）

初めて新制作展 SD 部に応募した作品は選外でした。応募するまで新制作展を見たことはありませんでした。デザインコンペのようなものかなと勝手に思い込み、製品デザインのような作品を出しました。選外の通知を受け取って「さて、何を作ったらいいんだろう」と少し悩みました。それから会場の写真などを見たり、アドバイスを受けたりしました。そしていろいろ考えました。

質問8 「メッセージ」

創作活動をされている方々（または出品を目指す人々）に向けた情報として、ご自身が関心を持っている現代のデザインや美術の作家や作品を挙げてください。併せてそのような方々に向けて何かメッセージをお願いします。

仙台市にある伊東豊雄氏が設計した「せんだいメディアテーク」によく行きます。中にある仙台市民図書館の利用が主ですが、様々なイベントや展示が行われるのでそれを見に行きます。青野文昭氏の「ものの、ねむり、越路口、こえ」（2019/12/2～2020/1/12）では、「修復」をテーマとして箆笥や食器棚、自転車、本などを接合させたスケールの大きな展示に圧倒されました。

質問9 「ビジョン」

あなた自身のこれからのビジョンとSD部の今後の展望をお聞かせください。

スペースデザイン部は、既存の大きな領域・分野の重なる部分に位置するものであること、そして生活空間の中から生まれるものであることが大きな特徴だと思っています。＜ファインアート＞のようでもあり、＜建築＞のようでもあり、＜工芸＞のようでもある。この「ようなもの」であることが新しいアートの世界を切り開く鍵になると考えます。